

令和8年 檀原市

二十歳のつどい 祝辞



輝かしい令和8年の新春に、「檀原市二十歳のつどい」にご参加されている皆さま、本当におめでとうございます。また、本日まで深い愛情を注いでこられたご家族や地域の方々、そして背中を支えてこられた友人や恩師の皆さんに敬意を表し、心からお慶びを申し上げます。

さて、令和4年4月の民法改正により成年年齢が18歳に引き下げられ、皆さんはすでに大人として、権利と義務を持った社会の一員となられています。ただ、周りから急に大人だと言われても、どこがどう変わったのかわかりませんよね。15歳でも大人びた人はいますし、20歳でもあどけなさが残る人だっています。実際、自分の成人式を思い出しても、何を経て、何を得て大人になったのか、僕も実はよくわかりません。それでも、どうにかこうにか目の前のことに必死になって生きるうちに大人になりました。社会にもまれる中で、大人なりの考え方や立ち振る舞いも、自然と身につきました。

そんな僕から言える言葉があるとすれば、「大人になりすぎず、未完成であることを肯定してください」ということです。

「未完成である」ということは、余白があるということです。それ以上何も入らないような完成された器ではなく、余白があるからこそ、他者の意見を取り入れ、時代の変化に合わせて自分をアップデートし続けることができます。

「未完成である」ということは、青臭さを残すことです。酸いも甘いも噛み分け、冷めた目で全てを分かった気になるのではなく、「私はここからだ」という純粋な青さと根拠のない自信こそが、世界を変える原動力になります。

「未完成である」ということは、魅力的なことです。人は、出木杉くんのような完璧な存在に圧倒されることはあっても、心から共感し、主人公になりえるのは、変化しようとして必死にもがいているのび太くんの姿です。

「未完成である」ということは、絆を紡ぐことです。ジグソーパズルのピースに凸凹があるからこそ隣のピースと噛み合うように、人もまた欠けている部分があるからこそ、誰かと深く繋がるができます。

だからこそどうか、「完成」することを急がないでください。もちろん、これから先、つまずいたり、自分の弱さに膝を抱えたりすることもあると思います。理不尽で、矛盾だらけな世界に絶望することもあると思います。そんな時は、未完成であることを肯定してください。

ここにいる君たちが、未完成の人生を存分に楽しんでくれることを心から祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉といたします。本日は、本当におめでとうございます。

令和8年1月12日

檀原市議会議長 うすい卓也

